令　和　４　年　第　９　回
富 山 県 教 育 委 員 会 会 議 録

Ⅰ　開会及び閉会の日時

令和４年８月30日（火）

開会午後１時00分、閉会午後２時21分

Ⅱ　場所

県庁４階大会議室

Ⅲ　出席委員

１番	黒田　卓	２番	町野　利道	３番	村上　美也子
４番	坪池　宏	教育長	荻布　佳子		

Ⅳ　説明出席者

教育次長	広沢　久也	教育次長	中﨑　健志
教育企画課長	坂林　根則	生涯学習・文化財室班長	麦谷　理香
教職員課長	板倉　由美子	県立学校課長	番留　幸雄
小中学校課長	水戸　英之	保健体育課長	大島　一恵

Ⅴ　傍聴人数　　14人

Ⅵ　会議の要旨

午後１時00分、教育長が開会を宣する。

１　会議録の承認について

令和４年６月27日開催の令和４年第７回富山県教育委員会会議録

令和４年７月12日開催の令和４年第８回富山県教育委員会会議録

会議録閲覧

荻布教育長から可否を諮ったところ、全員異議なく承認した。

２　議決事項

議案第20号　令和５年度富山県立学校募集定員等決定の件

⑴ 陳情書により陳情者から陳述がなされた。

陳情（氷見高校の普通科定員の減について）

陳情（令和５年度県立雄山高校の募集定員について）

陳情（県立学校の募集生徒数に関する陳情～いまこそ少人数学級に踏み出すとき～）

⑵ 県立学校課長から説明し、原案のとおり可決した。

３　報告事項

⑴　第４回令和の魅力と活力ある県立学校のあり方検討委員会の開催結果について

県立学校課長から説明した。

⑵　令和４年度全国学力・学習調査について

小中学校課長から説明した。

４　今後の教育委員会等の日程について

教育企画課主幹から説明した。

５　議事

〇議案第20号関係

〔教育長〕

・本議案については関連する陳情が３件提出されている。あわせて意見陳述の申し出があるが、富山県教育委員会陳情取扱要綱第３条の規定に基づき、陳情を出された方から事情を述べていただきたいと思う。時間は陳情１件につき５分とする。発言から５分を過ぎると事務局からベルを鳴らすので、よろしくお願いしたい。では始めに、林氷見市長お願いする。

〔林氷見市長〕

・氷見市長の林である。氷見高校の普通科定員の減につきまして意見を陳述させていただく。

氷見高校普通科定員の削減について人口減少及び生徒数減少とのことだが、なぜ氷見高校なのかの理由が明確ではないので、教育委員の皆様には子どもたちを含め、誰が見ても納得いくような客観的データに基づく丁寧な議論をしていただきたいと要望する。

県からの資料、私の資料２だが、本日の資料では資料３で平成30年度を基準年度として生徒数の減少が大きい氷見高校を対象にしたとあるが、平成30年度に生徒数の減少から１クラス減少している。その前の平成29年度を基準年度とすると、氷見市86人、射水市82人とこれまでほぼ同数の減少となり、氷見市は既に１クラス減少している。この資料を見ると誰が見ても射水市を減少すべきではないのかという結論に至るわけである。こういった基準年次の取り方で結果が変わるため、このような手法では意味がなく、また今日の資料でも新川地区は平成26年、高岡地区は平成30年からということで、穿った見方をすると、自分たちの議論が上がっていくような数字の取り方をしているのではないかと思う。そうではなく、氷見市の資料４のように現況の生徒数を基本として考えるべきだと思う。資料４だが、来年度の受検対象者となる中学３年生は、氷見市と比べて４割も少ない小矢部市だが、生徒数も192人、そしてこの普通科は３クラスのままで、氷見高校の普通科を３クラスから２クラスに減じるのは甚だ不公平だ。また、氷見市と生徒数がほぼ同じ魚津市は４クラスある。こうしたことは子ども達の普通科教育を受ける権利を著しく奪うもので、到底受け入れることはできない。

また、県全体の市町村別の入学定員と生徒数の比率が県平均で70.7%なのに対し、今回氷見市で１クラス削減となると61.9%となる。高岡市の88.7%と比較すると相当な教育格差が生じることとなってしまう。こうした市町村間の著しい不公平が生じない定員バランスを考えるべきである。県では学区ごとにバランスが取れていればよいと言っているが、極論すると氷見高校普通科を廃止して、すべて高岡市に集中させてもよいという危険な考えにつながりかねない。それよりも各市町村ごとにバランスのとれた定員配置を考えるべきだ。

また県では、慢性的に定員割れしている他の高校のほとんどが３クラスで、普通科だけの高校はこれ以上のクラス減は学校運営上できないが、氷見高校は職業科をあわせて６クラスあるのだから削減してもよいと考えだ。これは氷見高校が有磯高校と合併した努力をないがしろにするもので、今後さらに人口減少が続くので、小手先ではなく根幹的な学校統合の議論をすべきではないか。加えて氷見市は中山間地が多く、そこから市街地の氷見高校までも通学が大変なのに、さらに鉄道やバスで他市の高校に通うことは物理的に不可能に近く、子どもファーストで考えていただきたいと思う。またこうした県の偏った教育政策により市外への移住が進み、氷見市の更なる過疎化・人口減少を招くのではないかと大変危惧している。

以上のように、今回の氷見高校の１クラス減の県教育委員会事務局の案は著しく客観性に欠けるものであり、これが強行されると県の教育行政は大きな汚点を残すことになると思う。県民の代表である教育委員の皆様の良識ある判断をお願いしたい。

〔教育長〕

・次に舟橋立山町長、陳述をお願いする。

〔舟橋立山町長〕

もう１人の教育委員はおられないのか。

〔教育長〕
今日は欠席だ。

〔舟橋立山町長〕
どのような理由なのか。

〔教育長〕
体調の関係で、ご都合がありまして。

〔舟橋立山町長〕
・私の方からは７月 19 日付の要望書の補足説明をさせていただく。お手元のＡ３用紙、資料１・２をご覧いただきたいと思う。
教育長からのこれまでの説明では、生徒数が減少しているので新川学区からも１つ減らさなくてはいけないとのことだが、ご覧の通り県東部からの通学生はほとんどおらず、また立山町からも県東部の学校にはほとんど進学していない。つまり雄山高校普通科を減らしても、他の学校の２次募集定員割れ解消には何ら貢献しないといえる。それに対して、資料２の上部の通り、令和５年度において下新川郡は 10 名増えても中新川郡は 38 名減だと言われた。ところが、資料３をご覧の通り、令和６年度になると下新川郡では 30 名減となる。かたや中新川郡全体では５名の増加となるがいかがするのだろうか。
８月 25 日の木曜日、教育長と教育次長の中﨑さん、県立学校課長の番留さんが立山町役場においでになった。番留課長は先ほどの説明同様、上市高校と雄山高校ではこの 10 年間、一次募集で定員割れした人数は上市の方が少ないとおっしゃった。これが決め手となったとおっしゃった。ところが、上市高校では令和３年度から定数を 10 名減らしている。それがなかったらどうだったのか。それは見落としてはいけないものがある。募集人員 150 名のうち実は上市高校の推薦入試枠は 45 名だ。一方、雄山高校普通科には推薦枠がない。この表で比較されても私は承知できない。もちろん雄山高校普通科の一次募集の定員割れがあるのは事実である。教育長は普通科の定員は 40 名きっちりとしておかないと地方交付税の措置など国の財政支援が下がる。職業科である総合学科はそこまでお金が減らされないからだとおっしゃった。それでは、上市高校のように 10 名減とし、３学級目はたとえば観光コースではどうか。人材確保も必要となるため、町が財政負担してもかまわないと申し上げたつもりだ。想像するに県教育委員会事務局は、泊高校の統合過程で下新川郡の方々にご負担をかけた、そこで今度は中新川郡だ。大門、伏木、福岡も３学級だから、雄山高校が３学級になったとしてもそう反発はないだろうと思われたのではないかと思う。しかし、今度は私どもの資料４をご覧いただきたい。実は、他の３学級との決定的な違いがある。それは、雄山高校には生活文化科があることだ。女子の比率が決定的に高い。県事務局はそれを見落としていたのではないか。今後も、普通科で例年通りの比率で男子を確保できたとしても、令和７年度には１：３の比率となり男子生徒は全校で 90 人しかいない。これでは野球、サッカーのチームが作れなくなる。バスケも試合ができない。運動したい生徒は卓球か弓道のどちらかを選べばいいというのでは、中学男子が雄山高校を進路希望先としては選ばなくなるのではないかと思う。

〔教育長〕
・すみません。まとめてほしい。

〔舟橋立山町長〕
・最後に資料２ページ目の新聞をご覧いただきたい。富山市在住高校生の手紙だ。ある程度の規模を維持するために統廃合はやむを得ないが毎年のように小手先のことでよいのか。この決定を聞き来年も試合に出られる、勝てるとこの時間も練習している高校生が失望するのではないかと思う。もっと先を見て決定し

ていただきたい。

〔教育長〕
・ただいまの発言に対して、教育委員から何かあるか。質問等。ありましたらお願いしたい。町野委員。

〔町野委員〕
・少子化がどんどん進み、いよいよこういう話が始まったと感じている。この先 10 年、20 年どんどん子どもの数が減り、今日のような話はこの後何十年続く。方法は２つしかない。１つは今回のように各学校の学級を減らして、１学級当たりの人数を保持し、国の定めに従ってやっていく。もう１つは学級の人数を減らし、減った分を市町村が負担するという具体的な方法は２つしかないわけで、どっちをとるかでしょう。県は学級を減らす方法を言っているが、氷見市も立山町もお金を出しましょうという話をしているのではなく、うちで減らさないで余所で減らしてくれという話だ。私たちは子供たちに対し公平に公正に、そして人のことを考えてと教育しているが、トランプ大統領を代表にして自分のことばかり考えている。これでは駄目ではないか。私はどこをどうすればいいかという、そこに対する細かいデータとかを持たないから、どう判断するかというと公正に判断するという立場は県立学校課ではないかと思う。
いま、フランスは人口増に転じている。この前も話があったが明石市は人口増に転じている。基本的に根本のところの子どもの数を増やすということに手を付けなければいけないのでないかと思う。明石市は子どもにかかる費用を教育費、医療費、いろいろなものを無料にし、若い人を呼び込み人口増、それから予算も増えているということをやっているのだから、国や県が何かやってくれるだろうというのではなく自ら考えて解決策を講じられる必要があるのではないかと思う。
私は民間の出であるので、そういうことを好きなことを言うが、役人の方はなかなかそういうことは言いにくいだろう。そういうことで是非、自分のところで解決策を考えてほしいと思う。

〔舟橋立山町長〕
・私は市町村間の対立を思っているわけではない。最後に申し上げた通り、子どもが減少するのは間違いないので統廃合はやむを得ないと思っている。県立学校課長も２学級になると部活動が維持できないとおっしゃった。ならば、早急に統廃合の議論をしたほうがいいと思っている。でないと子どもたちは計画を立てたり夢を持てなくなってしまう。この案では来年度、雄山高校は普通科が２クラスで男子が少ししか入ってこないことになり、必然的に定数割れするとなるとそのまま廃校の道を辿ってしまう。教育長は令和８年度以降に統廃合の議論をしようとおっしゃったが、どうかな。先に雄山高校を潰せるなら潰してしまえ、楽じゃないかと考えているとしか思えない案にしか思えないので、不公平感を持っているため憤りはあるが、なるべく早急に統廃合の議論を進めていただきたい。小手先の今年こちらの子どもが増えたから来年はこちら増やそうとかあちら減らそうとか。振り回されるのは子どもたちなので、是非そういった議論をしていただけるとありがたいと思う。
もちろん小学校、中学校の問題は立山町長の責任でもあるので、しっかり地元の学校を維持できるよう頑張っていきたいと思っているが、高校については我が町には富山市から一番多くの子どもたちが通っている。全県的な視点から考えていただければありがたい。

〔町野委員〕
・いまおっしゃられたように、統廃合は数年後には必ずやってくるから、そういうことも念頭に置いて議論すればいいのではないかと思う。

〔教育長〕
・３番目に富山県高等学校教職員組合からの陳述をお願いする。

〔高等学校教職員組合　中山氏〕

・まず冒頭、問題からずれてしまうが、６月 28 日以来、学級減に関する新聞記事が出てから２か月間学校名を挙げていろんな観測記事が報道をにぎわせた。そのこともあり協議題が１カ月半遅れてしまったということについて、現中学校３年生やその保護者の方に対して県教委事務局には誠心から謝罪していただきたいと思う。この間の混乱や戸惑いはいかばかりだったかと思う。同時に２度とこんなことがないように万全を尽くしていただきたいと思う。
もちろん先程からお話があるように、教育的観点から次年度の募集定員というものを静謐な環境の中で検討していただきたい。様々な条件の中で秘密裏に進めておられると思うが、今年度のような状況は異常と言わざるを得ない。再発を絶対しないようにお願いしておきたい。
陳情書の裏面をご覧いただきたい。教育委員各位におかれましては、県内中卒生の学習権の保障、教育条件を守るという観点から資料に示している５項目を考慮し、来年度の県立高校募集定員を決定していただきたい。今のようなやり方というのは、この少子化の中、１学級 40 人のまま中学生の減少にあわせて学級減で対応するのは限界である。もう既に限界だ。統廃合云々という話が出ているが、その計画ができるどころか、ここ２～３年で破綻してしまうだろうと考えている。
そのままのやり方を踏襲した点が一つ。また、来年度の募集定員について行き詰ったやり方に矛盾がいっぱいになっていて、最初にご説明があった、配慮された３つの点についても、中学校卒業生の動向が全く違っている。逆行している。地域バランスをますます崩している。あと１つは県民のニーズというところが不透明ということですが、教育委員会の方針にも矛盾をきたしている。今回の高校の募集率 70.8%であるが、まずこの数字に矛盾があるということ。そしてこれを決めた「公私立高等学校連絡会議」のあり方について見直していただきたい。この矛盾した 70.8%をさらに下回る募集率 70.7%ということで、わずか７名だが、本来 183 人減らせばよいところを 190 人減らすということ。更に、基本的考え方にある普通科割合 66%程度、これについても不足していたところを更に低くしていくこのような決定については是非具体的に見直していただきたい。
資料中４、５にどのようにしていただきたいか書いてあるので、参考に協議をしていただきたい。

〔教育長〕
・それでは事務局からのご説明と今ほどの３件の陳情・意見を踏まえ、審議をいただきたいと思う。
教育委員の皆様からご意見お願いしたい。これをふまえて審議していきたいと思っているので、よろしくお願いしたい。

〔村上委員〕
・昭和の終わりから少子化が始まり、そこをピークとして子どもの数が減ってきているという厳然たる事実がある。今ほど事務局から御三家の富山高校、富山中部高校、高岡高校の３つの学校の普通科をそれぞれ減らす案が出た。この３つの学校というのは本当に志願者数の多い学校だ。平成８年以降学級減が行われていないことや、これまで２回の高校再編もあったという背景を考えると、志願者の多い学校であっても学級減を考えなくてはいけない時期に来ていると思う。よって３校同時の学級減について事務局の案は妥当であると思う。

〔坪池委員〕
・今のことに関してだが、この３校についてはこれまで大規模校としてのメリットを活かして実績を重ねてきたと考えている。学級減になってもこれまでの実績、パフォーマンスを維持するためにはやはり工夫が必要になってくる。３校はこれまでも探究科学科の発表会等で連携してきている流れもあり、今後さらなる連携を図り、知恵を出し合って対応してもらいたいと考えている。それから同時に学級減にすることについては、これまでの協議を踏まえると妥当だと思う。

〔黒田委員〕
・先ほどの首長の皆さんがおっしゃっていたかもしれないが、抜本的に、今後どのような富山県の県立学校

を考えるかだと思う。もちろん協議会でも議論がされているが、早急に検討していくことが大前提かなと思う。来年度に向けてということで、子どもの数が明らかに減っており、それを考えた上で今回それぞれの学校でも考えるためにも妥当なことかなと思っている。
どのように管理していくか、どことどこをくっつけるのか、そのような議論が今のところ多いのではないかと思うが、もう少し大胆に議論にする必要性もあるのかなと思う。高等学校教育に求められるものや、学習指導要領も変化しており、そういう中でどのような力を身につけさせるかという観点から考えなければいけないのかなと思う。
条件は各県によっていろいろ異なるが、規模が同程度の県を調べると、あまり正確ではないが高校数が富山と同じ位か多い県もある。その中で比較的コンパクトな形をしているのが私の出身の香川県かなと思う。香川の場合、30 校位でもともと少なかったこともあるかもしれないが、学級数を今のところ維持しているということもある。また、いわゆる総合的な探究の時間も始まっており、より専門的な知識をもった先生が必要となってくるので、普通科が今後どのような役目をもっていくのか、また、専門学科も色々な特色のある流れを提供しているので、そういうものをうまく活かしながら富山県としてどういう学校を作っていくのか考えていく必要があると思う。少し違う話をしたが、これに関してはいろいろなデータの見方があると思う。

〔教育長〕
・少し私から発言させていただきたい。中学校卒業予定者数に対する市内の県立高校の定員の率が市町村間でバランスに欠けるのではないかというご指摘があったかと思うのだが、それについて少し述べさせていただきたい。県立高校はそれぞれ設立の経緯や設置目的、歴史があり、学科の編成なども特色をもたせて設置されているという経緯があると思う。当然のことながら、一定の市町村内に設置させていただいているが、市町村立の小中学校と意味合いは異なり市町村の生徒数と必ずしも比例して定員が設定されているわけではないという事情があると思う。また生徒の実際の進路選択についても、それぞれの学校の特色や学科の配置状況、校風、部活動など何を学びたいか、どのような学校生活を送りたいかで進路選択をし、市町村圏域を超えて通学している実態があるのだろうと思う。
たとえば氷見市の生徒が氷見市内の高校に通っている率が学科全体でみると令和５年度が 61.9%になる。それに対して高岡市は 88.7%であるというような紹介があったと思うが、実際に氷見市の生徒が氷見市内の高校に通っているのが 44.6%で高岡市の生徒が高岡市内の高校に通っているのが令和４年度で 42.1%という数字になる。また、これを普通科に絞ると、氷見市の場合、いわゆる定員率が令和５年度 24.8%になるということだが、これに対し、実際は 20.2%の生徒が進学している。高岡市では定員の比率だと 41.5%とのことだが、実際に高岡市の生徒が高岡市内の高校に通っている率は 20.7%である。たとえばこのような状況で、要は生徒数に対する定員比率のバランスが取れてないからといって、学ぶ権利が奪われているといった不公平な状況になっているとまでは言えないのではないかと考えている。

〔村上委員〕
・氷見高校と雄山高校に関しては、地元から本当に大きな反対が上がっているところであり、丁寧な審議が必要だと思っている。このような学級を減らしていくことを考える時、やはり公平に全県下という視点において考えていかなくてはいけない。年度によって違うという事があってはならない。生徒数、学区の状況、そしてそれを踏まえた上で全県的な視点ということを考えると、学区内、特に統廃合地域における子ども達の減少というのが１つどうしても影響する因子となってくるという風に考えている。そのような点でやむを得ないのでないかと思う。

〔坪池委員〕
・氷見市と立山町からの要望書を読ませていただきましたし、陳情もしっかり聞かせていただいたつもりだ。定員が削減されたり男子の入学者が減ったりすることで、市外への流出が加速するのではないか、それから部活動の制約など切実な問題があるということや自治体としての願いもよくわかっているつもり

だ。しかしながら、これだけ中学校卒業予定者が減っていく状況や、今後もさらに減少していく状況を考えるとやむを得ないかなと考える。規模が小さくなっていく学校には、小規模校の特長を活かした学校の特色化、魅力化に努めてもらいたいと考える。
学級編制については、中学校卒業生予定者の動向や志願状況を総合的に判断して決定しており、事務局から説明があったことについては教育委員会でこれまでもこのような方法で行ってきたし、市町村にもこの方法で説明してきていると思う。従来の方法で考えた場合に今回の案は妥当なものだろうと思っている。ここでこの方法を変えることになると、これまでの学級数を否定することになりかねない。あるいは次年度以降の学級減の対象となる学校への対応がなかなか難しくなっていると思う。仮にこの方法を見直すとなると、やはり議論が必要ではないかと考える。総合的に判断すると言ったが、様々なファクターをどの程度重視していくかによって結論が異なるのは仕方がないことだと思う。今後とも教育委員会事務局では学級減や学級編制の考え方を明確にして丁寧に説明するよう努めてもらいたいと思う。
それから一般論であるが、大規模校では学級減を回避するために再編を推進する立場、小規模校については存続のために再編を抑制する立場、あるいは大規模校の学級減を求めることになりがちだ。それらの両方を成立させるのはなかなか難しいことのように思う。ただ、先ほどの立山町の話を聞くと、立山町では再編を推進する立場のように聞こえたので、少し立場が違うかもしれない。
今回は普通科を減らすことになっているが、今後さらに中学卒業予定者が減少していくことになるので、普通科と職業科の比率と、配置のあり方について考えていく必要があるそういう時期に来ていると思う。たとえば、普通科に並立された１学級１学科の職業科についても検討課題だと思う。また、国では普通科教育を主とする学科の弾力化を言っており、地域社会に関する学科設置を可能とする普通科改革が検討されている。こうした国の動きを参考にしながら、学校等の意見を聞き、現在設置されているあり方検討会で進めてほしいと思う。

〔教育長〕

・40 人未満の学級について立山町長と高教組から発言があったと思うが、少しそれに触れさせていただきたい。おっしゃるように少子化に対応するためにクラス数を減らさずに１クラス当たりの人数を減らして対応することも理論上は可能である。ただ、そこで問題になるのが国の法律で、標準法といっているが、１クラスは 40 人を基準とするというものがあり、それに基づき教職員のいわゆる人件費など財政的なものが国から措置されている仕組みがある。よって、もし仮に幅広くどの学校、どの学科でも 39 人、38 人にすることになると、このルールから外れていくことによって国からの財政的な支援が非常に大きく減少し、県の財政負担が大きくなっていく。仮に、今回学級減の対象となった学校への適用を考えた場合、どの学校のどの学級までやるのか。今年の対象校だけでなく、来年度以降も少子化が続くので、そうした学校についても広めていくのか。これまでにも既に学級減となり、今回の対象校と同様の規模に小さくなっているところもある。そうした中でこのやり方というのが、国の制度改正がなされる前に実現するのはなかなか難しいのではないかと私どもは考えている。今後の学級編制も非常にやりにくくなると考えており、この対応は難しいと考えた。
また、高校再編の議論も必要ではないかというご意見もいただいた。再編については令和２年度に４件の再編統合があったわけで、その時の考え方として再編統合の実施方針は平成 30 年２月に策定しているが、平成 29 年当時の小学校１年生が高校に入学する令和８年度を見通して実施しようと行ったのが、令和２年の再編統合の方針であり、令和９年度以降の対応については今後の生徒数の推移も踏まえて今後改めて協議するというのがこれまでの考え方である。令和２年度の再編統合の考え方は、１学年４学級未満または 160 人未満の規模の学校を再編統合の検討対象とすることに基づき進められてきた。この基準についてはこれまでのものであり、今後再編統合について検討をしていくということになれば、基準についても改めて検討していくことになる。
現在、教育委員会では昨年度から「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方検討委員会」を設置し、県立高校の今後のあり方について議論を進めているところである。今後この検討委員会での議論も踏まえ、再編の必要性や、その際の規模や学校配置をどう考えるかについて改めて検討していくことになると思って

いる。本日、多数のご意見をいただいた通り、そういった検討を進めていく時期が近づいてきていると考える。
最後に、本日、大西委員は欠席されているが、事前に意見を表明されておられるので事務局から紹介させていただきたい。

〔事務局〕
・それでは、大西委員から届きました意見を読み上げさせていただく。「令和４年第９回富山県教育委員会に関する意見書、教育委員大西ゆかり。議案第 20 号、令和５年度富山県立学校募集定員等決定の件。本議案によれば今回５つの県立高校普通科がクラス減となるが、対象となる学校の生徒たちがこれまでと変わらない指導を引き続き受けることができるようご支援をお願いしたい。」以上。

〔教育長〕
・ありがとうございました。他に委員の方からご意見はあるか。もしご意見がないようなら、議案第 20 号について採決したいと思う。この議案第 20 号につきまして原案どおり決することについて異議ないか。皆さん、賛成でよいか。はい。承知した。異議ございませんので議案第 20 号については原案通り可決することとする。

〇報告事項（1）関係
〔村上委員〕
・定時制・通信制高校の現状と今後のあり方の中で、外国人の生徒の中で素晴らしい教育を受けている方と、学校に行けているのか、教育を受けているのかわからない生徒がいる。この中に外国人に対する対応が含まれているのか。不十分であれば是非そうゆうことに対しても考えていただきたいと思うのだがどうか。

〔県立学校課長〕
・実際に外国から来た生徒も通っているが、もともと定時制は少人数での対応をしているので、そのような生徒に対し各学校で工夫してやっていると思う。ある一定の学力を持っているということが条件であるので、個々には対応しているがやっているかどうかは少し確認しないとわからない。

〔教育長〕
・今回、来年度の募集定員決定の件ということで大きな決定をする委員会となった。この間、募集定員の発表について、進路選択する生徒のためにもできるだけ早く発表したいという思いでいたが、公表が今日になったことは受検生等生徒の皆さん、ご家族、関係者の皆さんには申し訳なかったと思っている。
今回の決定だが、ご説明申し上げた通り、中学校の卒業予定者、進路の状況、志願状況、各学科の状況等を踏まえ、こうして審議をして決定をさせていただいた。氷見市や立山町からもご要望、意見を頂戴した。やはり地域の学校について学級減というのは歓迎するような話ではなく、いろいろ思いやご意見があり、なかなか納得いただくことは難しいところがあるのはわかるが、総合的・広域的に判断した今回の決定についてなんとかご理解いただきたいと思う。
該当する学校については、これまでも充実した教育ができるようにと現場で努力しているが、学級減となっても充実した教育が行われるように引き続き、魅力ある学校になるよう私どもも努めていきたいと思う。少子化が今後も続いていく中で、富山県の教育全体として、それをどうしていくのか。より良い教育を少子化の中でどのように作っていくのか、真剣に考えていかなくてはいけないと思う。教育委員の皆さん、ご関係の皆さんには今後ともよろしくお願いしたいと思っている。

（終了）
午後２時 21 分、議事が終了したので教育長が閉会を宣した。